

<「放射能汚染調査・測定活動情報共有化交流会」報告>

測り続けることの大切さ100台以上の測定器が自由に使える意義を
考えよう

Ｔウォッチ理事 井上啓

8月18日（日）午後1時30分から江東区亀戸の東京労働安全衛生センター会議室で、「有害化学物質削減ネットワーク」（Ｔウォッチ）及び「放射能汚染食品測定室」「たんぼぼ舎」共催による「放射能汚染調査・測定活動情報共有化交流会」が開かれました。

3・11東日本大震災と連動して発生した福島第一原子力発電所の重大事故と膨大な量の放射能放出から2年4か月。事故発生直後から「放射能汚染食品測定室」及び「たんぼぼ舎」の放射能測定器（NaIシンチレーションカウンター）はフル稼働、Ｔウォッチ5月末から放射能測定を開始、多くの市民の要請に応じて農畜産物や各種食品、飲料水、環境土壌など約4000件の測定を実施してきました。

とくに、Ｔウォッチは三井物産環境基金の震災復興助成を受け、福島原発周辺地域及び関東地方など数か所を定点観測地点として選定し、当該地域の方々と協議、協力し定期的な環境と食品等のセシウム汚染測定を実施してきました。

また、独自に測定体制を整えた地域との定期的情報交換も行ってきました。その範囲は福島原発を中心に東北、関東の全域に及び、放射能汚染の広がりとその影響の深刻さを見せつけられるものでした。

事故当初はヨウ素131も検出されましたが、測定の中心はセシウム134、セシウム137となっています。2年経過してセシウム134は当時の半分になりましたが、137とともに依然として高濃度の汚染物もあります。

最近、汚染水問題で高濃度汚染が話題となり始めているストロンチウム90やトリチウム（H3）汚染の実態についてはほとんどわかっていませんが、汚染水の流出や地下水系を通しての海洋流出は止められない実態が浮かび上がっています。

福島第一原発でむき出しになった膨大な放射能を閉じ込める方策は何一つとられていません。数百キロにまき散らされた放射能を市民生活環境から隔離する術もなく、その場しのぎの「除染」という名の移動策だけで状況は悪くなるばかりです。地下水対策や汚染水貯蔵対策の不手際から、周辺海域の汚染と海洋生物汚染の深刻化を考えると暗たんたる思いです。

今回の交流会は、この2年間、定点で協同して測定活動に取り組んできた地域や、定期的に情報の交流を進めてきた市民測定室と共に、それぞれの測定活動の結果を共有し、測定活動の今後のあり方や相互連携について話し合おうと開かれたものです。

以下、市民エネルギー研究所の小泉好延氏による話題提供、Ｔウォッチが進めてきた定点測定地点での活動報告、主催3団体による測定活動のまとめ、参加者による活動報告、意見交換の概要です。

小泉好延氏は、事故直後から機能してきた放射能汚染食品測定室とたんぼぼ舎の測定デ

一タ、および2か月後から動き出したTウオッチの測定室の測定データ、合計約4000件のまとめ（表1参照）について特徴を開示しながら、この2年間に生まれた100か所以上の市民測定の現状とこれからの市民測定の役割と意義について話されました。

この間の測定は、多くは市民からの依頼で、測れるものは何でも測ってきた。その濃度も当然ながら地域差が大きい。大きく分けると土壌などは外部被ばくに係わるもの、食品類は内部被ばくに係わるもので、厚生労働省が当初示した基準値との関係で混乱が生じた。

当初の500Bqはチェルノブイリ事故時の基準で5mSv/yを前提にしたものだったが、自主基準を決めるにあたって混乱が生じたと思う。今は新基準値が示され食品で100となり、水では1/20、乳幼児では1/4に改められ落ち着いてきた。今後、自主基準を考えるなら新基準の1/2を一つの目安にしたらどうか。ストロンチウムやプルトニウムなどの汚染実態がわからない以上、より少なくする努力が必要。外部被ばくとの関係で環境測定も続けることは大切。かつてアメリカのゴフマン博士らが示した1万人mSv当たりのガン死率を考えると、子供たちのへの影響を重視し、地域的汚染実態の調査が必要。最近明らかになった広島・長崎被爆者の遺伝子レベルの障害実態を考えると、文科省などの汚染マップでは不十分。原発の爆発以前に放出された希ガス等の汚染や被ばく量など、被ばくの広がりや考慮しないといけない。除染で汚染がなくなるわけではない。限りなく除染ができるわけではない。最低限必要な空間を除染し、削り取った汚染物を集めて立ち入り禁止にするなどの措置をとるしかない。

市民測定の意義は、今や全国100台以上の測定器を自由に使い、行政などの外部からの拘束を受けないデータをとれることだ。広域的なデータが集積されていくことは、汚染地図とのプロットや汚染基準との比較などを可能とし、公的データのチェックや公表を迫る力となる。

市民測定所への測定依頼は激減して、閉鎖もあると思うが、測り続けることの意義を共有すること、ゲルマニウム半導体検出器を持つ測定所もあり、連携して測定精度の維持を図るネットワークを作り、少なくとも基準値の1/2が維持できるようにすることが必要。

各地・各団体からの報告Tウオッチの定点測定地域からはあしがら農の会とアジア学院が参加し活動の報告をしました。

あしがら農の会は有機農業を基本にした生産消費活動を実践しているグループで、事故直後、生産している製茶から高いセシウムを検出して以来、穀類や野菜、肉類、土壌等を系統的に測定し、水管理や時間経過による濃度変化を踏まえて、有機農業の基本を踏まえた対策を進めている活動を報告しました。

アジア学院は、アジア、アフリカの農業指導者育成を基本に、研修生に有畜複合・有機循環型農業と自給自足の生活を実践しているところで、震災の被害と農場の放射能汚染という中で、環境や農畜産物の汚染を一つ一つ確認しながら対策をとってきたことを報告しました。中でも、汚染の影響を受けやすい乳牛などは飼育自体をあきらめたり、汚染をため込んでいる落ち葉や、腐葉土、除染したコンクリートくず、焼却灰などは遮蔽効果の高い袋に入れて、使えなくなったシイタケ林に隔離する措置を取っている、と報告。

この報告に、小泉氏は対策の立たないことをすっぱりあきらめ、汚染したものを減量して、隔離できるところに貯めるということをそれぞれやることはいいことだとコメントしました。

たんぼ舎の鈴木さんからは、事故後、管理していた2台の測定器で1日16検体を測り、25年前のチェルノブイリ事故後、来る日も来る日もピークが表れない測定を続けてきた経験とおよそ異質な現実につづき、恐怖を覚える毎日で、睡眠不足も重なって何度か気を失う状態だった。最近は依頼も少なくなって丁寧な測定ができるようになったが、測らないで知らない方がいいという風潮がみられる。測定の役割は消費者に正確な情報を知らせることだと思うので、測り続けていきたい。と報告しました。

放射能汚染測定室の樋田氏は、チェルノブイリ以降、一度も電源を落とさずにいたことが、直後のデータをリアルにとらえられたことは大きい。生活クラブからの牛乳からヨウ素がすぐに検出され、牛の呼吸による吸入と考えられることから、今後、周辺の住民のヨウ素被ばくや甲状腺被害への参考データとして利用できると考えている、と報告しました。

新宿代々木市民測定所からは、内部被ばくについての検証を考慮して、NaI測定器と共にGe半導体測定器を導入、尿の測定を中心に仕事を進めるべく準備中。

また、やはり25年前から小金井市の行政とタイアップして測定活動してきた消費者グループから、粉ミルクの原材料ごとの分析を進めることや、小金井市レベルでも行政とタイアップした測定の継続、市民広報等が続けることが報告されました。

高木基金からは、基金助成の一環で協力すること、大地を守る会からは、測定器を数台動かしていることや、福島にGe測定器を提供しており、今後協同を強めたいと報告されました。

小泉氏からはGe半導体測定器の機能を生かして、市民測定活動の精度向上に役立てられるようネットワークを強めることがコメントされた。特に、NaIの校正を定期的に行えるようにすることが提言された。

また、それぞれが自分たちの基準を作って、その中でデータを振り分け、自分たちの領域でまず処理をしていくことが大事だ。そうして、時間をかけて一つのモデルを作り、各地に発信していく。そうした協同のあり方を進めてほしい。市民エネ研も測定器を持っている。守りとしての活用ではなく、相手とどう戦うか、どう私たちの主張を通すか、そういった覚悟で測り続けてほしい、と締めくくりました。



表1 放射性セシウム(Cs134・Cs137合計)の含有量
(測定室&たんぽぽ舎&Tウオッチ合算)

項目 カテゴリー	測定件数	セシウム(Bq/kg)		ND*件数	ND*%
		最小値	最大値		
野菜類	544	3	58	91	17%
果菜類	167	6	8	22	92%
根菜類	77	3	23	20	69%
茎菜類	45	4	10	12	75%
葉菜類	246	5	58	36	71%
花菜類	9			1	100%
山菜	36	3	1,140	16	44%
豆類	83	3	188	52	63%
大豆	29	3	188	10	34%
豆類その他	54	3	43	42	78%
きのこ	43	2	4,800	19	44%
シイタケ	29	2	4,800	9	31%
きのこその他	14	6	132	10	71%
くだもの	152	2	187	59	39%
茶葉	48	5	3,300	6	13%
イモ類	142	4	32	107	75%
サツマイモ	35	4	17	25	71%
サトイモ	17	10	15	15	88%
ジャガイモ	82	5	32	60	73%
イモ類その他	8	11	11	7	88%
穀類	455	1	260	265	58%
麦	59	3	98	23	39%
玄米	184	1	213	108	59%
白米	154	2	260	108	70%
稲穂・粃	30	4	95	12	40%
穀類その他	28	3	204	14	50%
飲料	835	1	310	767	92%
茶等抽出液	10	1	17	3	30%
牛乳他	825	1	310	764	93%
肉	211	1	121	167	79%
卵	221	2	48	214	97%
水産物	176	3	220	132	75%
魚介類	144		220	105	73%
海藻	32	3	100	27	84%
水	116	1	580	102	88%
沢水	4			4	100%
井戸水	15	3	3	14	93%
水道水	34	4	4	33	97%
農業用水	8			8	100%
プールの水	6	3	147	4	67%
水その他	49	1	580	39	80%
菜の花・菜種	20	2	3,400	5	25%
飼料	23	3	100	15	65%
落ち葉・堆肥	58	8	28,000	4	7%
草木	63	4	54,000	11	17%
ワラ	5	48	600	0	0%
草	17	5	4,100	6	35%
木	16	4	4,900	1	6%
葉	6	25	240	2	33%
焼却灰	19	30	54,000	2	11%
土壌	403	2	370,000	10	2%
農地	144	6	176,000	3	2%
公園・街路	13	27	260,000	0	0%
居住地	40	3	370,000	0	0%
土壌その他	206	2	102,000	7	3%
加工食品	137	3	36	118	86%
その他	44	4	3,550	30	68%
総検体数	3,810	1	370,000	2,528	66%

*: 検出限界未満

・たんぽぽ舎・測定室データは'11年5月～'12年12月、Tウオッチデータは'11年5月～'13年7月に測定したもの。